イスラーム世界研究　第２巻１号（2008 年）332-336 頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 2-1 (2008), pp. 332-336

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』報告
――エジプト・カイロ大学、アラビア語――

平松　亜衣子 *

2008 年２月６日から４月 11 日にかけて、私はアラビア語の習得のためにエジプトの首都、カイロに滞在した。アラブ諸国を訪れたのは、去年の９月にクウェートを訪れて以来２度目となる。今回の渡航先であるエジプトといえば、まず思い浮かべるのは砂漠にそびえたつピラミッド、また、古代エジプトの遺産が多く保存されている国立博物館なども有名である。しかし、当の私はといえばアパートから学校への徒歩 15 分の道のりを往復する毎日を送っていた。

語学学校は、世界有数の大河であるナイル川沿いにあった。学校とアパートのあるエリアはガーデン・シティと呼ばれ、イギリスの保護領であった時代に現地の行政当局が置かれていた地区である。また、現在カイロで最もにぎわっているタフリール広場へは、北へ歩いて 10 分という便利な場所でもある。ガーデン・シティには、今でも当時の建物がそのまま、あるいは部分的に改装されただけの状態で残されており、私のアパートも保護領時代に建てられた古い建物であった（写真①）。学校へ向かう大通りにはエジプト政府の官庁が建ち並び、大型のスーパーマーケットではなく、個人経営の小さな商店街が軒を連ねていた。

写真①　アパートのベランダから

カイロでの食生活と語学習得

カスル・アイニー通りに軒を連ねる商店が、私にとってはエジプトでの生活そのものであったと言ってもよい。日本でいうコンビニのような存在である商店、果物屋、生の果物をその場で絞ってくれるジュース屋、パン工房、お菓子屋、水タバコの店、露天でシシカバブを焼いている小さな飲食店、魚屋（そのまま調理してもらい、店の奥で魚料理を食べることもできる（写真②））、仕立屋と隣接した洋服店、携帯ショップなどが

写真②　魚屋で食べたグリル料理。味付けされたご飯と一緒に食べる。右上にあるのは、代表的なアラブ料理の一つである、ひよこ豆のペースト。

*　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

軒を連ね、庶民の生活に必要なものはすべてこの通りで調達することができた（写真③）。毎朝、ターメイヤ（豆をつぶして揚げた有名なエジプト料理）のサンドイッチを売る店の前を通ると、大勢の人々が集まってターメイヤを買ってゆく。

　なかでも、私がエジプト滞在中に一番よく口にしたのは、エジプトの「国民食」とよばれるコシャリである（写真④、⑤）。カスル・アイニー通りには、２軒のコシャリ屋があった。授業は水曜、金曜を除いて週に５回あり、授業の帰りはこの２軒のコシャリ屋へ交互に通っていた。最初にコシャリ屋を見つけたのは、夕方の６時頃、空腹に耐えかねてレストランを探しながら通りを歩いていた時であった。当時はカイロに来てから日も浅く、またカイロ在住の日本人との接触もほとんどない時期であり、アパートの近くではどこに飲食店があるのかさえ全く分からなかった。探し回っているうちに日も暮れ、足もそろそろ疲れてアパートへ引き返そうかと思ったとき、目に入ってきたのが１軒のレストランらしき建物であった。空腹と心身の疲れがあったせいか、エジプトではスナックとして扱われているコシャリに心の安らぎを覚え、それから学校帰りにはコシャリ屋へ通うようになった。もちろん、エジプトにいる間コシャリばかり食べていたわけではない。朝と夜は家で自炊もした。商店で米を買い、一度だけ家で白ごはんを炊いたこともある（次頁写真⑥、⑦）。味は日本のものほど甘味はないように感じられた。エジプト料理では、いつも米は味付けされて出てくるのも無理はない。

　普段は、パン工房で買ったアイエーシ・フィーノというコッペパンのようなものとミルクに、オレンジかバナナという取り合わせで食事を済ませていた。以前から、アイエーシと呼ばれる平たくて丸いパンはあったそうだが、アイエーシ・フィーノという発酵させたパンが普及していることは、某中東研究

写真③　エジプトの街角

写真④　エジプトの「国民食」コシャリ。日本人には食べやすい味。並盛は50円～100円、大盛りでも250円ほどと値段もお手頃。具は、茹でて短く切ったマカロニとスパゲッティ、米、ひよこ豆、それにパリパリに揚げた玉ねぎのみじん切り。上に乗っている小皿にはトマトソースが入っている。

写真⑤コシャリ(2)　ふつう、テーブルにはさらに２種類のソースが用意されており、好みに合わせてかける。１つめは、香味野菜とレモン汁と塩を混ぜ合わせたようなソース、２つめは、赤唐辛子の入った非常に辛いソース。

者の方も驚いておられた。80年代にエジプトに滞在していたころにはなかったそうである。そのほか、パン工房には中東のものと思われるパンのほかに、クロワッサンやデニッシュパンもたくさん並べられていた。カスル・アイニー通りには、２軒のパン工房があった。学校帰りに、２軒のコシャリ屋と２軒のパン工房を隔日で訪れるのが次第に習慣となっていった。おかげで、非常に経済的な食生活を送ることができた。

写真⑥　炊飯中・・・

　果物に関しても、思い出深いエピソードがある。エジプトでは、オレンジやバナナは安いが、赤いリンゴやイチゴは高い。なぜなら、それらは国外からの輸入ものだからである。普段、安いオレンジやバナナを食べていたのは好みの問題であるが、ある日、赤いリンゴを買おうとして値段の高さに驚いた。１キロあたりの値段は、オレンジやバナナの６～７倍といったところである。はじめは、私が日本人であるために割高料金で売ろうとしているのだと思い、「高すぎる！」と抗議したところ、「だったら買うな。」と言われてしまった。値段が高い理由は、語学学校の先生から後日聞いてやっと納得のいったことであった。帰国前、エジプトで知り合った人のパーティには、少し上等なものをと思い、滞在期間中に通りにオープンした洋菓子店のチョコレートと、赤いリンゴとイチゴを持っていったのを思い出す。ちなみに、日々の買い物をする際に、アラビア語で値段交渉などができるようになってくると、食生活や金銭管理のみならず、アラビア語の学習の意味でも大いに自信がついてくる。これも、現地で語学を学ぶことの長所のひとつである。

写真⑦　炊きたてのエジプト米

現地で語学を学ぶことの魅力とは

　ITPの最大の魅力とは、現地で語学を学べることである。現地で覚えた単語の吸収力は、日本にいるときよりも数倍高まっているように思われる。現地では、アパートから一歩出ればアラビア語の世界が広がっている。何をするにもアラビア語が必要である。そこは、まさに学校で覚えた単語の実践の場として最適である。それは、日常会話であれ専門的な用語であれ同じことである。テレビをつければ、私の研究分野である政治用語が頻繁に聞こえてくる。

　また、同じアラブ人でありながらクウェート人とは違った視点を持つエジプト人と、クウェート

の政治について議論する機会を多く得ることができた。はじめ、私が「クウェートの民主主義についての本を読みたい。」と言うと、語学学校の担任教師は、「クウェートの民主主義ねぇ。」と、無関心かむしろ面白くないといった反応を示した。実際に、「私には無理。」と言って断られそうになったほどである。しかし、一度授業が始まると非常にクウェート政治の文献に興味を示され、私よりも熱心なのではないかと思うほどに真剣に指導してくれた。また、授業が終わってから次の生徒が来るまでの間、「さっきの本について話しましょう。」と言い、「私はこう思うのだけれど、あなたの意見はどうか。」と真剣な議論をしたこともあった。（もちろん、基本的にアラビア語を使用しながらである。）このような体験ができるのは、ITP ならではの魅力であろう。

地域研究の面白さ――現地でのトラブルから学んだこと

この愛着深いカスル・アイニー通りから離れることになったのは、帰国も近づいてきた３月末のことであった。原因は、アパートの仲介業者との金銭の絡んだトラブルである。そのトラブルには、仲介業者だけでなく、アパートの管理人や修理屋など複数の人々が関係していた。エジプトのアパートの１階には管理人が住んでいる。彼はアパートの所有者とは異なるが、アパートに実際に住んでいるのは所有者ではなく管理人である。

上記以外にも、さまざまな厄介な理由が重なっていたために、愛着のあるガーデン・シティを離れ、夜中に荷物を運び出し、日本人女性のＫ氏の住むアパートへと転がり込んだ。Ｋ氏の現地の友人が車を出してくれ、エジプトに来て以来、初めてガーデン・シティを離れた。すると、まるで別の町に来たような気分になった。すでに紹介したとおり、ガーデン・シティは保護領時代の建築物が建ち並ぶ町である。しかし、南へ下ってゆくと、社会主義時代に入ってから建設された都市が現れた。カイロには、多くの日本人研究者や院生が訪れ、日本学術振興会のカイロ支部もある。Ｋ氏およびその他の日本人の院生の方々とは、そこで行われた懇話会で知り合いになった。エジプトに来て金銭トラブルに遭わない人はいない、とＫ氏は快く迎え入れてくれた。はじめて滞在する国では、いざという時、このようなネットワークがいかに貴重であるかを痛感した。

今回の語学研修では、アラビア語の学習のみならず、それ以上に重要なことを学んだのではないかと感じている。アラブ世界に限ったことではないが、現地の事情に通じていない外国人に高額な金銭を要求する、といった金銭トラブルはよく起こることである。私もその例に漏れることなく、現地で金銭トラブルを起こしてしまった。その時、指導教官である小杉泰先生および、現地でトラブル解決に尽力してくださったサイエド氏から教わったことがある。このような金銭トラブルは、法律に違反する「犯罪」でもなければ、合法的に人を騙す「詐欺」でもない。エジプト（およびアラブ世界）では、金銭を払った時点で、「合意（イッティファークという）」が成立したとみなされるのだという。「なるほど、これも地域の論理なのか。」と知ったとき、トラブルが研究対象地域に関する興味深いエピソードとなった。同時に、単に被害者意識だけで終わらせるのではなく、地域研究を学ぶ者として真摯に向き合うべき出来事であったと感じている。今回の研修で、現地の論理が分かったなどとは到底言えないが、現地に行くと、まるで子どものようにわからないことだらけであることは実感した。

現地に行くと、自分の中の普段とは違った一面が顔を出す。しかし同時に、フィールドワークは自分の性格を反映した形でしかできないものだ、という友人の言葉を思い出さずにはいられなかった。金銭トラブルひとつとっても、日本にいるときと同じような失敗を犯した。ITP は、現地語習得の機会としても最適であるが、同時にフィールドワークという側面も持ち合わせている。今後派

遣される学生が現地でどのような収穫を得て帰国するのか、非常に楽しみである。